

文学雑談

文学部 位 藤 邦 生

雑談

「雑談」の文字は、古く、ザウタンと読んだらしい。とりとめもない話の意である。人と人との触れ合いから生まれる雑談が、然し、多くの文学を生んだ事実は、「今昔物語」などの例を引くまでもない。文学の生まれる場としても、また、文学享受の場としても、雑談は、昔から大切な営みであった。

この場を借りて、文学についての雑談を試みたい。

物理学や政治学といった分野に比べると、文学の概念には少々曖昧な印象がある。文学とは何か、文学は何のためにあるか、といった問いかけが、繰り返し繰り返し、行われるのも、そのことと関係があるだろう。

文学の達人

英文学者の福原麟太郎氏と中国文学の吉川幸次郎氏とは名だたる碩学であったが、お二人の対談の中に、次のような一節がある。

福原 まあ、文学っていうものは、やっぱりことばの問題だと思うんですね。

吉川 人間、いかに生きるべきか、ということを知るために文学を読むといえますね。むろん、それもありますけれども、いかに生きるべきかをかんたんに知ろうと思えば、これはさしさわりがありますが、哲学という、もっと便利なものがあるし、宗教という、もっと便利なものもあります。むしろ文学はまわり遠いものですから、気の早い人には文学を読まない人がありますよ。文学を軽蔑している人も、世のなかにはそうとうおられます。ただ、そういう人の生き方は、どうも荒っぽくなるのではないかという感じを、ぼくらはもちますね。

人間の個別的な具体的なありさまを知るためには、文学にしくもはない。それが文学の価値であるとともに、人生いかに生きるべきかと、むつかしく構えて文学を読むことも、態度として有力であることも知っております。しかし、アミューズメントとして読むことはいけないうか、ということなんです。

自分の知らない世界、日常生活ではおこりえない事柄、そういう好奇心から読んでもいいと思いますね。好奇心は人生に貴重なもので、好奇心が盛んであればあるほど、人間は幅の広い生き方をするのではないかと思います。ですから、娯楽のために文学を読むことは、大いに推奨していいのではないのでしょうか。「文学的人生——福原麟太郎対話集——」から「文学・人間・思想」

気楽な対話として語られているものの、深い英知に支えられたお二人の言は、今もなお文学研究の根底に据えられるべき、大切な問題を提示している。

文学探究

ところで私は最近「伏見宮貞成の文学」と題する小著を上梓した。およそ二十年にわたって発表してきた論文の中から、テーマに沿ったものを選んで一書としたのだが、漢文日記を文学作品として認めるか否かについては、今後いろいろと多様な意見が出て来そうな気配があり、目下はそれを楽しみにしている。その小著の中で、私は「文学」を考える素材として、次のような短文を引いた。

てんしやう十八ねん二月十八日に、をたはらへの御ぢんほりをきん助と申、十八になりたる子をたゝせてより、又ふためともみざるかなしさのあまりに、いまこのはしをかける

成、は、の身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつし給へ、いつかんせいしゆんと、後のよの又のちまで、此かきつけを見る人は、念仏申給へや、卅三年のくやう也。

かつて名古屋市熱田の精進川に架けられていた、裁断橋の、擬宝珠銘文の一つである。この銘文の存在を、私は、保田與重郎氏の名著『日本の橋』で教えられた。

保田與重郎氏はこの文章について次のように書いている。

銘文はこれだけの短いものである。小田原陣に豊臣秀吉に従って出陣戦没した堀尾金助といふ若武者の三十三回忌の供養のために、母が架けたといふ意味を書き誌したものだが、短いなかにきりつめた内容を語つて、しかも芸術的気品の表現に成功してゐる点申し分なく、なほさらこの銘文はその象徴的な意味に於ても深く架橋者の美しい心情とその本質としてもつ悲しい精神を陰影し表情してゐる。

文学の主題

前掲の小著の中で、私は、保田氏の文章につづけて、次のように書いた。少々長くなるが引用してみたい。

右に引いた銘文を例として、私は、文学について考えてみたいと思う。ここに書かれた老母の文章は、よく文学になっていると私は思う。たどたどしい文章のつづきが、却って、よく作者の思いを伝えている。この文章が文学になった所以は、純一な「主題」がよく現れ、これを読む者の胸に一直線に迫るからだと言えないだろうか。この銘文が書かれた時分に新聞記者がいたと仮定して、その新聞記者が、橋を架けたひとりの老母とその銘文の内容とを、第三者の立場で綴ったならば、その文章が伝える内容、それが読者に与える感銘は、よほど違ったものになっていたろうと考える。とすれば、文学を支えるものの性質が、ここからも見えてくると思われるのである。

右の銘文の作者に文学意識があったであろうか。「文学意識」とは、特定の個人の中にひとつの文学観がまずあって、その文学観に

基づいて、文学をつくりあげようとする意識である、と、さしあたっては定義しておきたい。(中略) そのような意味で「文学意識」を考えれば、右の銘文の作者に文学意識があったとは、私には思えない。けれども、それにもかかわらず、右の銘文は「文学になっている」と、私は考えるのである。この短い文学作品の主題は「死んだ子を永遠に追慕する母親の愛情」であろうと思う。(中略)

銘文が我々の心を打つのは確かであって、私はそのプロセスを

- 一. 銘文に主題が存在する
- 二. 銘文の主題は銘文の表現によって支えられている。
- 三. 我々読者が銘文の主題を把握するという過程として、捉えている。

ところで銘文の作者自身は、自分の文章の主題をどのように考えていたであろうか。銘文には、①架橋の趣旨 ②息子が成仏できるようにとの祈り ③読者(橋を渡る人々)への願い、の三点が書かれているように思われる。そして、この三つの要素は絡まりあって表現されているわけで、三要素のうち、どれがいちばん大切だとは言いつて切れない。我々にも言いつて切れず、まして作者には、私がこの文章から析出した三つの要素すら、そのように分断され得るものだとは、意識されていなかったであろう。ここから考えられるのは、銘文の作者にあっては、文学研究の術語としての「文学意識」と呼ぶべきほどのものは、殆ど意識されていなかったであろう、ということである。「モチーフ」は確かにあった。作者にとって言わずにいられないもの、保田與重郎氏のいう「この世にありがたい純粹の声」があった。しかし、銘文の主題は、文章を通して我々が読みとるものである。

真実のことは

こんなふうを書いて、私は「文学」と「主題」との関係述べようとした。それにしても私は、小著の文章の中で、銘文から受ける我々の感銘について、もう少し丁寧に説明しておくべきだった。ここで一つだけつけ加え

ておく。銘文には「天しやう十八ねん二月十八日に、をたはらへの御ぢん」云々とある。すでに述べたように、この銘文が書かれたのは金助の三十三回忌の供養のためであった。もし銘文に「天しやう十八ねん」とだけ書かれていたとしたら、我々の受ける印象はかなり違ったものになっていたろう。母親は息子の出陣した年を、月を、日を、三十二年たった後も決して忘れていなかった。忘れられなかった。母親にとって、三十二年の年月も、日ごとの悲しみに満ちていたに違いない。先に引いた福原麟太郎氏の言葉に、「文学っていうものは、やっぱりことばの問題だと思うんですね」とあったのを、思い出したい。ここでの「ことば」は、私の言う「文学を支える表現」の謂であろうが、「真実のことば」の意味でもあろう。私は、短い銘文をゆっくりと読んでゆき、最後に至って、これが三十三回忌の供養のための文章と知り、改めて、最初の言葉（天しやう十八ねん二月十八日）の重みに打たれたのであった。

文学研究法

繰り返しになるが、私は、銘文を読んで感銘を受けたプロセスを

- 一. 銘文に主題が存在する
- 二. 銘文の主題は銘文の表現によって支えられている
- 三. 我々読者が銘文の主題を把握すると要約した。また同じ論考の中で、私は、次のようにも述べている。

ある作品が「文学作品になっている」のは

- 一. 「作者が意図した主題」と「読者が読みとる主題」とが存在する場合
- 二. 「読者が読みとる主題」が存在する場合

の二つがあるわけで、両者の間に、文学作品としての価値の高低があるわけでは決してない。

こうした私の立場は、長い間『看聞日記』をはじめとする漢文日記を読んで来、同時に『とはずがたり』『竹むきが記』などの女流日記を読みつづけてきた自分の経験から、自

ずと導かれたもので、特に文学理論を勉強したわけではなかった。日記文学を専攻して、日記とは何か、文学とは何か、日記文学とは何か、をつねづね考えてきて、いつの間にかこんな考えを持つようになったのである。

中学や高校の国語の授業で、短編小説などの教材を読んだあと、「この作品で作者は何を言いたかったのでしょうか」という設問によく出会った。その時は不思議とも何とも思わなかったが、今にして思えば、これは私の言う

「一. 「作者が意図した主題」と「読者が読みとる主題」とが存在する場合」のうち、「作者の意図した主題」についてのみ問いかけていたわけで、文学作品の読解としてみれば、著しく不自然なものであったように思われる。けれども、日本の文学研究は実は、長い間、こうした不自然さに気がついていなかったのである。

欧米で流行した「分析批評」などを垣間見て、日本の文学批評、文学研究の偏りを知ったこともある。最近では「記号論」や「ディ・コンストラクション」といった研究方法にも興味を持った。しかし外国で流行する研究方法を安直にとり入れることに強い抵抗をおぼえるのも、私自身に関して言えば、事実である。文学作品について「主題」のみを云々することが、すでに古い方法であろうことは、私自身気がついている。が、それでもなお、私は、私が実感した文学の手ざわりを大切にしたいと思っている。

「実直に」、「愚直というふうにも」、文学を追い求めてゆきたい……今のところ、これが私の願いである。

